千葉歴史の散歩道

片歯（かたは）の梅

県教育庁教育振興部文化財課文化財主事　佐山（さやま）　淳史（あつし）

JR成田線下総松崎駅から県立房総のむらに向かって15分ほど歩くと、坂田ヶ池と呼ばれる池が見えてくる。周辺一帯は坂田ヶ池総合公園として整備されており、休日は池で魚釣りを楽しむ人や、巨大すべり台等の遊具で楽しむ家族連れでにぎわっている。

その坂田ヶ池を反時計回りに進んで行くと「片歯（かたは）の梅」と呼ばれる一本の梅の木があり、その名前の由来となった話が木の前に掲げられている。

かつてこの池に住んでいたという雄の大蛇は、毎年梅雨くらいになると、４㎞ほど離れた長沼へと雌の大蛇に会いに行ったそうで、そのたびに土手を崩してあたりを水浸しにしていたらしい。当然村人は土手が崩れないように直そうとするが、何度直しても崩れてしまう。途方に暮れていたところに、幼児を背負った見知らぬ女性が現れた。その女性は自分を人柱にすれば土手は崩れないと、夢の中で神様に言われたと言う。村人は言われたとおり、女性と子供を土手に埋めた。それから土手は崩れなくなり、土手からは一本の梅の木が生えた。その梅の木は、女性が背負っていた子がかじっていた梅から生えたもので、「片歯の梅」と呼ばれるようになったという。またこの木になる実には、かじったような跡がついているとも言われる。

選ばれた人間が犠牲になる話と言えば、ヤマタノオロチの話や、白羽の矢が立った家の娘が犠牲になる話などが有名である。ただし、これらは人身御供（ひとみごくう）、つまり人間が何者かに食べられてしまう話で、食べ物として供えられる人間は共同体内部の人間であり、最終的にスサノオのような外から来た者の活躍によって、その習慣がなくなることもある。

一方、人柱の話には、橋や堤などを強固にするため、呪術的に人間が埋められるといったものがよく見られる。この場合、犠牲になるのは共同体とは関係のない外部の人間であることが多い。人柱の話は各地に伝わっており、大正14（1925）年には皇居二重櫓の改修工事中に、頭に古銭を置かれた人骨が立った姿で出土し、人柱が実際に行われていたという証拠の一つではないかと議論になった。

坂田ヶ池で実際このような風習があったのかは定かではないが、私たちの歴史の中には供養や慰霊とも違う死者への向き合い方があったのだろう。その感覚について、実感をもって理解することはもう難しい。すっかり安全な公園として生まれ変わっている池の姿に、過去とのギャップをより強く感じさせられた。（参考文献：六車由美『神、人を喰う』新曜社2013）

千葉教育　菜（No. 672）　令和４年２月３日発行

編集・発行　千葉県総合教育センター　（代表）酒井　昌史
〒261－0014　千葉市美浜区若葉２－13　　TEL　043－276－1204
URL　https://www.ice.or.jp/nc/
印　刷　所　千葉市療育センター　いずみの家
〒261－0003　千葉市美浜区高浜４－８－３　　TEL　043－216－2465